



神話の構造主義的分析 -キャンベル, プロップ, レ ヴィ=ストロース

ベナマル, カリーム

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要, 9:27-39

(Issue Date)

1998-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001193>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001193>



神話の構造主義的分析

— キャンベル、プロップ、レヴィーストローヌ —

ベナマル カリーム

本稿で私は、神話が人類学者、民族学者、心理学者や社会学者だけでなく、哲学者の研究にも値するものであることを示したいと思う。神話の物語は科学的なディスコースとは大きく異なる。科学的・概念的ディスコースは、意識的な思考、厳密な論理、明瞭な概念を使って、真理を目指す。「明晰」や「光」がそのメタファーとして考えられるだろう。一方、神話は、複雑で多義的な物語形式によって、しばしば夢のイメージや象徴を使いながら、神や超自然の力と人間との出会いについて語る。神話は、無意識的・神秘的な冒険と、そして測り知れない人間の心の深遠さと結びついている。神話は、科学的あるいは概念的言語によっては表わすことができないような複雑な仕方、人間の心と無意識の深い真理を表現していると、神話学者たちは主張する。

科学的あるいは哲学的な神話の研究においては、私たちは少なくとも二つの大きな困難に直面している。すなわち第一に、様々な文化における無数の神話のヴァリエーションの存在と、第二に、神話において諸要素が果たす役割とその意味の混乱である。

まずはじめに、今までに発見された五千以上の文化において、無数の種類の神話が存在している¹⁾。これらの文化の各々には、創造神話、部族の歴史、社会制度、道徳の根拠を記述する神話が見いだされるが、それらは、口承であるため

にヴァリエーションは無数で、時代によって変化し、時には相矛盾する。しかし、クロード・レヴィ・ストロース (Claude Lévi-Strauss) は、神話の様々なヴァリエーションは、神話の分析に対する障害になるどころか、むしろ神話における機能・構造・モチーフの作用を明らかにするのに役立つと言う。レヴィ・ストロースによれば、「神話」は、その歴史的・文化的ヴァリエーションの総計から成るのである。²⁰

第二に、神話における様々な要素はしばしば混乱していることが挙げられる。例えば、宇宙の現象や気候の現象と神の行為とが混同されたり、動物が人間の性質を持つたり、人間が動物や半動物に変えられることもある。あるいは歴史的な出来事と伝説的な出来事が混同されていることもよくある²¹。これは、神話が様々なレベルで機能を果たすように、神話における諸要素が故意に混合されているとみなすべきであろう。しかしながら、現代の科学的思考では、これらの諸側面は区別されている方が望ましいと考えられているために、神話は自然を説明する前科学的な試みとみなされがちである。このような見方からすると、神話は自然現象を神や精霊によって説明しようとする、安易で素朴な誤った試みに他ならないということになる。しかし私は、神話における様々な要素の混合は、複雑で多層的な現実を、象徴的な物語形式によって表現するための強力な方法であるということ(この方法はしばしば誤解を招くこともあるが)、また、この混合は単なる混乱や無知のために生じているのではない、ということを本稿で示したいと思う。

以上、神話のヴァリエーションの豊富さと混乱した複雑さという二つの問題を指摘したが、本稿では、紙幅の関係上、神話の様々な分析方法を概観することはできない。そこで、ジョゼフ・キャンベル (Joseph Campbell)、レヴィ・ストロース、ウラジミール・プロップ (Vladimir Propp) によって展開された重要な概念に焦点をあてたいと思う。第一節では、普遍的な有効性をもつ象徴としての神話的イメージ (mythic image) についてのキャンベルの見解と、神話の機能についての彼の定義を考察する。第二節では、神話の構造主義的分析の四つのレベルを提示する。この四レベルにおいて同時に

神話を分析することによって、私は、神話の内的な論理と神話的象徴の複雑さの意義とを理解できるようになることを論じようと思う。最後の第三節で、私はそうした構造主義的分析の道具が、神話的なナラティブの複雑さと見かけの混乱とに深く分け入り、その意味とメッセージを解くための鍵を私たちに与えてくれることを示すつもりである。

一、神話のテーマの普遍性と神話の機能

異なる文明の神話に同じイメージ・象徴・出来事が見出されることを説明するためには、二つの理論、すなわち普遍性 (universalism) の理論と伝播 (diffusion) の理論が存在している。第一の普遍性の理論は、人間の精神構造は世界中で基本的に同じであり、それゆえ、この精神構造の現れは、異なる文化においても類似せざるをえないものである。第二の伝播の理論は、神話が人類の移住とともに、ある地方から他の地方に伝播したというものである。この場合には、神話の類似点は、異文化相互の接触 (それがいかに弱いものであろうとも) に由来すると考えられる⁴⁾。伝播の理論は神話間の影響関係を説明するには十分ではないと私は考える。それゆえ、ここでは普遍性の理論に的を絞って論じたいと思う。

キャンベルは、その生涯を通じた神話の研究において、異なった文化間の神話の類似性に絶えず驚きを感じていた。例えば、彼は十字架、処女懐妊、洪水といった象徴のヴァリエーションをあらゆる神話に見いだす。「洪水のモチーフを持たない神話はほとんど存在しない」と彼は言う⁵⁾。キャンベルは神話の研究の結果として、人間の精神の普遍性を信じるようになったのである。キャンベルはまた、神話的象徴や出来事は文字通りに、あるいは歴史的に解釈されるべきではないと主張する。

「神話的イメージが語るのは、いつかどこかで起こったことや、いつかどこかで起こるであろうことではない。それは、今あること、昨日あったこと、明日あるだろうこと、永遠にあることを指し示しているのである。」⁽⁶⁾

神話的イメージは歴史的なものではなく、人間のおかれていた状況を記述するためのメタファーなのである。神話は、私たちが近代の科学的思考において発達させてきた、直線的な進歩史観には収まりきらないような、時間を超越した人間の経験のアスペクトを呼び起こす。神話は特定の文化の中で表現されるけれども、その意義と意味は特定の文化を越え、普遍的であるとキャンベルは主張する。

キャンベルは、神話は四つの主要な機能を果たすと主張する。

1. 神話の神秘的機能…神話は、人間の存在や人生の目標についての私たちの理解を超越している神秘的次元に、私たちが関係することを可能にする。それは、人生の神秘さに対する私たちの畏敬の念をも明らかにするのである。
2. 神話の宇宙論的機能…すべての文化に見いだされる創造の神話は、宇宙の起源や世界の形式を説明する。この意味では、神話は、現代の科学的思考の先駆者と考えられる。ただし、神話は、世界の神秘性を示すものだから、科学的思考に対立するものではなく、むしろ科学的思考に対して補完的なものであると考えるべきだろう。
3. 神話の社会的機能…キャンベルによると、これは「ある種の社会秩序を支え、それに妥当性を与える機能」である。たとえば、神話には近親相姦の禁止や結婚の規則を正当化する語りが含まれることがあるということが、レヴィ・ストロースによって示された⁽⁷⁾。また、社会の法や規範を破ることは、神話においてはしばしば、神の法・おきてを破ることとして記述される。

4. 神話の教育的機能…キャンベルがしばしば強調する、神話のもう一つの機能は「神話は、いかなる状況にあっても人間らしい生涯を送る方法を教えてくれる」ということである⁽⁸⁾。キャンベルによると、この機能は現代では過小評価され

ている。しかし、神話のこの教育的機能それだけでも、神話の研究を価値あるものにしてくれるように思われる。

神話が様々な程度において、この四つの機能を同時に果たすことを留意しておくことは重要である。神話は、様々なレベルにおける物語であつて、単なる歴史でも道徳的な訓話でも教育的な物語でもない。どうして雷が鳴るのかとか、動物がどのように人間とかかわるのかといったことについての、科学的な説明にとどまるものでもない。多くの段階で四つの機能を同時に果たす神話は、複雑で幾層にもわたるナラティヴなのである。

二二 構造主義的神話分析のレベル

問題は、神話的なナラティヴのこの複雑性をどのように理解すべきかということである。簡単に言えば、構造主義の方法は、要素よりも構造を分析し、そして分析された構造の間に相同関係 (homology) を発見することにある。ここでは、構造主義的方法論的主張と二〇世紀思想におけるその歴史的役割については取り扱わない。むしろ、この構造主義的方法によつて、私たちが複雑性の異なるレベルで、どのように神話を分析できるのかということを示したいと思う。キャンベル、レヴィーストロスそしてプロップによる神話・昔話の分析をふまえると、複雑性と抽象性についての四つのレベルを区別することができると思われる。この四つの異なるレベルは最も具体的なものから最も抽象的なものまで、順に要素・ファンクション・モチーフ・公式 (formula) の四レベルである。

最も基本的な「要素」のレベルでは、神話における様々な要素を比較することができる。構造主義的分析によれば、他のナラティヴと同様に、神話の基本的な要素は記号と象徴から成る。象徴は複雑な記号であるが、記号のように恣意的なものではなく、ある文化に特有の想像的背景と結び付いている。記号論的研究によれば、象徴は二重、三重の機能を果た

したり、多くの次元を指示したり、二つの領域の間に橋をかけたたり、また曖昧な機能を果たすこともある。象徴としての神は、歴史的事件、宇宙論的な特性、特定の動物の力、嫉妬のような人間の感情、あるいはこれらすべてを同時に表現したり、暗示したり、指示したりすることができる。この要素のレベルでは、私たちは、様々な要素の意味と意義を探究するのである。

次のレベルはファンクションのレベルである。プロップのファンクションという概念は、もともと昔話の研究において展開されたものであるが⁽⁹⁾、昔話はしばしば神話のより単純なバージョンと考えられているので⁽¹⁰⁾、神話の研究においても広く使われている。プロップによると、ファンクションとは「筋の進展におけるある行為の意味というパースペクティブから定義される、登場人物の行為」である⁽¹¹⁾。

プロップは、彼が無作為に抽出した百の昔話が、31のファンクションから成り立ったものであると言う。これらのファンクションはいつでも同じ順番で現れる。もともと、ふつういくつかのファンクションは全く現れないのであるが。加えて、三人兄弟の昔話のような例では一連のファンクションが繰り返し現れる⁽¹²⁾。

例として、プロップの分類におけるXIV番のファンクション「魔法のアイテムが主人公の手に入る」を考察しよう⁽¹³⁾。

ここでは、主人公がそのアイテムをどうやって、誰から手に入れるかは重要ではない。また、そのアイテムが何であるか、どんな力を持っているのかも重要ではない。そのアイテムが人間であったり、主人公が身につける能力であったりするとさえある。魔法のアイテムを手に入れるという行為こそが、昔話や神話のあらゆる可能なヴァリエーションにおける主要なファンクションなのである。ファンクションによる神話の分析は、神話の特定の要素を超越することを可能にする。私たちはもはや神話の特定の要素、例えば、この魚やあの熊、この精霊やあの結婚、戦い、盗みといった要素には関わらないのである。むしろ、神話や昔話のナラティブは、内的に関連したファンクションの構造と解釈されるのである。

キャンベルは、英雄物語の神話分析において、英雄の旅を17のステージに区別する¹⁴。これらのステージのいくつかは、プロップのファンクションに対応する。例えば、第三のステージは「超自然的な助け」と呼ばれ、プロップのXIV番目のファンクションとよく似ている。しかしながら、違いもある。キャンベルのステージは、英雄が通過する時間的な状況であり、乗り越えなければならぬ段階であるが、プロップのファンクションは、行為にかかわるものである。

要素の比較からファンクションによる神話の分析へと進むことは、神話が語る単なる特定の物語ではなく、神話の構造の理解へと進む第一歩を踏み出すことになる。第三のレベルは、レヴィーストロースの分析が示すところによれば、ファンクションのレベルより複雑な、モチーフのレベルである。レヴィーストロースは、神話における諸要素は小説のように筋道を追って読んだり、分析したりしてはならず、むしろ音楽作品におけるモチーフのように、これらの諸要素は繰り返しされると主張する¹⁵。レヴィーストロースによる、神話の構造と音楽の構造の比較は、構造主義的分析の力量・複雑さ・多才さをよく表わしていると私は思う。

モチーフによる神話の分析が重要であるのは、それによって私たちがナラティブの構造を越え、行為や出来事（プロップの言葉では、ファンクション）の集まりというレベルへと進むことができるからである。これらのモチーフの間の内的関係によって、私たちは神話の構造を理解できるようになるのである。構造主義的分析によれば、このような抽象的レベルでの神話の構造の理解は、神話の様々な意味を解説する鍵を私たちに与える。

四番目の最も抽象的な構造主義的分析のレベルは、公式のレベルである。ここでは、一つの根本的な構造あるいは公式から、神話の大部分のヴァリエーションを引き出すことができる。キャンベルによれば、英雄物語の「原質神話」(monomyth)を世界中の神話において見つけることができる。原質神話の根本的構造は、出立・イニシエーション・帰還という三つの主たる運動から成る円環である。この構造はグレイマス (Alexandre Greimas) とレヴィ・ストロースに

おいても見いだされる。この根本的な円環は先ほど述べたように17のステージに分けられる。

プロップは、ファンクシヨンの様々な結びつきを研究することによって、すべての昔話がそこから派生するような一つの公式を提示する¹⁶。レヴィストロースもまた、神話の抽象的な構造を表わすために、単純な数学的公式を使う。レヴィストロースによれば、人間の思考の構造は根本的に二元論的、つまり対立的なものである。例えば、男―女、天―地、明―暗、善―悪などの対立を考えればよいだろう。すべての神話は、人間の思考に内在するこうした二元性を超越しようとするものであることを示すが、レヴィストロースの四巻にわたる『神話論』(Mythologies)における構造主義的分析のテーマだった。レヴィストロースの公式は、プロップの公式よりずっと基本的なものであり、神話の構造において働いている二元性を示している¹⁷。具体的には、神話は最初の状況あるいは対立から、その内的な構造が変化したヴァリエーションへと変形される。この新しいヴァリエーションは、最初の対立を解消するのではなく、むしろその対立を別の対立に置き換えるのである。

三：神話の分析：構造から意味へ

プロップのように、多種多様な神話や昔話を単一の公式によって記述することは、還元主義的な試みのように思われるかもしれない。実際、このアプローチを使うと空虚な形式や一つの昔話しか残らない、と述べてレヴィストロースはプロップを批判する(18)。形式主義に対するレヴィストロースの批判は重要であるが、構造主義と同様に形式主義にも見いだされる「形式vs内容」論争について評価を下すことは、本稿の趣旨から外れている。神話を公式に還元すること、あるいはモチーフの相互作用に還元することさえ、重要ではないということに私は同意する。神話の分析を生産的に行うた

めには、私が先に提示した要素、ファンクション、モチーフ、公式という四つのレベルすべてにおいて同時に分析を進めなければならない。プロップのファンクションの驚くべき点は、そのダイナミックな性質である。昔話や神話のナラティブは、要素のレベルにおいてでなく、「行為のタイプ」のレベルにおいて理解される。膨大なヴァラエティの対象や人物が、明白で明瞭なファンクションの中で、並べ替えられ、置き換えられているのである。プロップが単一の公式によって表現しようとしているのは、単一の形式への還元ではなく、ファンクションの組み合わせが昔話や神話のナラティブな構造を記述しうることを示す理論だと解釈できるだろう。

最も抽象的なレベルでの神話の分析はまた、他のすべてのレベルにおける分析を充実させ、異なった視点から神話の要素を解釈することを可能にする。レヴィーストロースは、神話の要素がどのようにして抽象的・理論的オペレーターとして働きうるのかを示している。カナダ西部のインディアンの神話の分析において、ガンギエイという白い腹と茶色の背をもつ平たい魚がバイナリー・オペレーターのような役割をどのように果たすのかを彼は示す⁽¹⁹⁾。

私たちは、神話の構造の関係・結合・置換を明らかにするために、プロップのファンクションとレヴィーストロースのモチーフを、豊かさと汎用性を持つ道具として使うことができる。それは神話の複雑さを減ずることではなく、神話の内的なダイナミックスを明瞭にすることによって、神話を理解可能なものにするのである。構造を理解することは、私たちが神話の内容とそのメッセージを理解することを助ける。私の考えでは、構造主義的分析の目的は、複雑なナラティブの構造主義的分析によって、神話の意味と意義を私たちが理解できるようにすることなのである。

この構造主義的分析は、神話の意義を解く鍵を与えてくれる。結局のところ、レヴィーストロースとキャンベルは、神話の「内容」を重視しているのである。つまり、神話が特定の語りを越えてどのように真理へと向かうのかを知ることこそが、レヴィーストロースとキャンベルの目標なのである。レヴィーストロースの複雑な分析によれば、神話は私たちの

思考の根拠、そして私たちの人間性と思考の本質を明らかにする。レヴィ・ストロースは、いわゆる原始的な民族の思考の論理を神話の中に見いだす。これらの神話の分析を通して、私たちは、これまで理解できないと思われるいた原始的な民族の思考のパターンを分析することができるのである。そして、ここで注意すべき点は、この分析を通して、この分析それ自体を行う時の私たち自身の思考のパターンをも、私たちは分析しているということである。

キャンベルにとって、神話は人生の意味を与えてくれるものではなく、生の経験を記述するものである。この経験は、世界中の神話において記述されている。これらの経験のいくつかは私たちにとって異質のものであるが、それらは人間の経験の広大な蓄積から生じるものであり、私たちに語りかけるなにかを持っているのである。キャンベルによれば、今日の英雄物語は、どのようにして自分自身の内にある神性を見つけるか、そしてどのように自分の至福を追求するのかを、私たちに教えてくれるのである。

結論

本稿で説明した構造主義的道具立てを使うことによつて、太古から現在に至る五千もの個別的な文化における神話とその無数のヴァリエーションは、解釈不可能なものではなくなるということが、私が本稿を通じて示したかったことである。私たちの探究の出発点であった二つの困難に関して言えば、神話の無数のヴァリエーションもその多層的な複雑性も、分析や理解の妨げにはならない、ということを私たちは見てきた。構造主義的道具立てによつて、私たちは様々な時代の象徴や概念を比較したり、翻訳したり、明晰にしたりすることが可能になる。さらに、概念の使用は科学的・概念的デイスコースに限られるものではない。私たちの文化的無意識から生まれてくる神話的イメージとしての象徴は、複雑で多機能

な概念として機能しているのである。したがって、神話の概念および神話の構造の分析は、哲学的にも重要な意味をもつ
と私は思う。

本稿の一部を英語から日本語に翻訳してくださいと岩崎豪人氏、および、私の日本語の表現を訂正することに協力して
いただいた、田山博子氏、桜井徹氏に感謝する。

注

1. 一九八四年のフランスのテレビ番組「アポストロフ」(Apostrophes)でのインタビューにおけるレヴィルストロ
ースの発言。
2. 同右。
3. 同右。
4. ジョゼフ・キャンベル、『神話の力』、一〇五―一〇六頁。
5. Joseph Campbell, *An Open Life*, p. 83.
6. Joseph Campbell, *An Open Life*, p. 79.
7. Claude Levi-Strauss, *Les structures élémentaires de la parenté*, passim.
8. ジョゼフ・キャンベル、『神話の力』、七七頁。
9. E. Meletinski, "L' étude structurale et typologique du conte", in Vladimir Propp, *Morphologie du conte*, pp.202-254.

10. ジョゼフ・キャンベル、『神話の力』、二四三―四四頁。Claude Levi-Strauss, "La structure et la forme", in

Anthropologie structurale deux, p.155-7.

11. ウラジミール・プロップ、『昔話の形態学』、三五頁。

12. 同書、三五―四〇頁。

13. 同書、六八頁。

14. ジョゼフ・キャンベル、『千の顔をもつ英雄』。

15. クロード・レヴィ＝ストロース、『神話と意味』、六一―七六頁。『構造人類学』一三四―三五頁。

16. ウラジミール・プロップ、『神話の形態学』、一七〇頁。

17. クロード・レヴィ＝ストロース、『構造人類学』、二五二頁。

18. Claude Levi-Strauss, "La structure et la forme", in *Anthropologie structurale deux*, p.159.

19. クロード・レヴィ＝ストロース、『神話と意味』、三〇―三二頁。

参考文献

Joseph Campbell, *An Open Life* (San Francisco: Harper & Row, 1990).

ジョゼフ・キャンベル、ビル・モイヤーズ、『神話の力』、飛田茂夫訳、早川書房、一九九二。

ジョゼフ・キャンベル、『千の顔をもつ英雄』、平田武靖訳、人文書院、一九八四。

Claude Levi-Strauss, *Les structures elementaires de la parente*, nouvelle édition, (The Hague: Mouton, 1967).

- Claude Levi-Strauss, *Anthropologie structurale deux*, (Paris: Plon, 1973) .
- Claude Levi-Strauss, *Mythologiques*, 4 volumes, (Paris: Plon, 1964-1971) .
- クロード・レヴィ・ストロース, 『神話と意味』, 大橋保夫訳, みすず書房, 一九九六。
- クロード・レヴィ・ストロース, 『構造人類学』, みすず書房, 一九七二。
- Vladimir Propp, *Morphologie du conte* (Paris: Seuil, 1970) .
- ウラジミール・プロップ, 『昔話の形態学』, 北岡誠司・福田美智代訳, 水声社, 一九九一。